

2022 年 1 月 17 日

2021 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

母乳授乳の予想と現実：帝王切開術を行った母親の声

Breastfeeding Expectations and Realities:

Voices of Mothers Experienced Caesarean Section

20-MW-013

畑 のぞみ

論文要旨

I. 研究目的

本研究の目的は、帝王切開術を経験した母親が持つ母乳授乳への予想（妊娠中のイメージ）と現実との違いを明らかにし、今後の母乳授乳の支援を検討することである。

II. 方法

研究デザインは、Web 調査にて探索する前向き観察研究である。研究対象は6か月以内に帝王切開術を受けた、日本語の読み書きが可能な産婦とした。内容は、参加者の基礎情報、妊娠中の母乳授乳のイメージ、産後の母乳授乳の現状、産後の体調、母乳授乳の思いについて情報収集を実施した。そして項目ごとの基本統計を算出し、自由記載で得られた質的データに関しては、意味内容をまとめて分析を行った。

III. 結果

帝王切開の母親の、母乳授乳に対する妊娠中のイメージと実際の経験とのギャップを把握するために、55名の母親からWebアンケートに回答を得た。その結果、ギャップが少なかったものは、「母乳を昼夜あげることは大変である」「誰もがすぐにできるものではない」のイメージであり、逆にギャップが大きかったものは、「乳頭が痛いという経験をイメージしていた」「赤ちゃんは簡単に吸い付くと思っていた」「おっぱいが張って痛いという経験をイメージしていた」であった。母乳授乳をしていて「嬉しかったこと」は、【幸福感】【十分な栄養を与えられた安心感】【母としての特権】【生命力】であり、「悲しかったこと」は、【身体的な疲労】【疼痛】【児に拒否されて戸惑う】【母親失格の気分】【制約がある】【周囲から傷つけられた経験】との表現が認められた。母親がケアとして受け取っていたことは、【授乳ケア】【術創のケア】【意思決定支援】【メンタルヘルスへの気遣い】であり、【ケアを受けられなかった】という記述も少し認められた。帝王切開術を経験した母親が次の人へ伝えたいこととしては、【帝王切開術は勇敢で幸せな体験】【無理をせず自分をいたわる】【身体も心も想像以上に疲弊している】という内容であった。

IV. 結論

帝王切開術を行った母親は、母乳授乳に対して「大変なことであり容易くない」と予測しており、それは現実と一致していた。しかし経験をして初めて知った「乳頭や乳房の変化や痛み」は事前にイメージすることはできずギャップを感じていた。よって、助産師は、妊娠中の情報提供とあわせて、帝王切開後の母親が産後に初めて体験することは事前にイメージできずギャップがあることを理解してケアする必要がある。